

No. 337【2018年12月28日配信】

青森風 (担当: 児玉)

こんにちは。文化財課の児玉です。今年も残りあとわずかとなりました。そして、いよいよ平成最後のお正月ですね。お正月の風物詩として、風揚げが思い浮かびますが、最近は滅多に目にすることも無く、寂しくなったように感じます。

風揚げのルーツは、中国と考えられており、日本には平安時代中期に編纂された『和名類聚抄』という辞書に、「紙鳶しえん」、「紙老鴿しろうし」として風かぜのことが記載されています。

江戸時代後期の文政(1818-1830)の頃から明治維新前後の津軽地方の年中行事や庶民生活の様子などをまとめた『弘藩明治一統誌月例雑報摘要抄』には、風は天保(1830-1844)の頃から大型になり、40から50枚もの風が弘前の上空を上下し唸りをあげていたが、万延(1860-1861)の頃に絶えて無くなったということが記録されています。

明治20年(1887)頃から、弘前では風揚げが盛んになり、やがて武者絵を主流とし、骨をヒバの柁目板で作った「津軽風」が確立しました。この頃、青森でも風揚げが盛んになり、河原などに繁茂する根曲がり竹で骨を組み、漁網用の糸を使った青森独特の風が作られました。

青森出身の柿崎琴章きんしょうは、若い頃、東京で歌舞伎看板を制作していたそうで、青森に帰ってきてから歌舞伎を題材とした大首絵(顔を大きく描いたもの)の風絵を描きました。琴章は、明治時代後期から大正末期頃まで制作していた「ねぶた」にも、歌舞伎を取り入れました。現代の青森ねぶたで見られる「歌舞伎」のねぶたは、この頃からのものと伝えられています。

琴章の家の真向かいには、高田與吉よきちの花火屋(寺町)があり、琴章の風絵のほか、琴章の指導を受けた花火職人達の風絵も花火屋で販売され、それらは「ヨッケだこ」と呼ばれていました。この花火店で琴章の弟子にあたる一戸清則は、やがて独立して浦町駅前通りで造園業を営みながら、歌舞伎絵を題材とした「一戸だこ」を制作し、「青森風」の代名詞となります。

青森風は、戦前には浦田野脇の山川の建具屋で作られ、その後も茶屋町や大野、荒川、新城、飛鳥などでも製作されるようになりました。終戦の翌昭和21年に復活した「ねぶた」とは対照的に、青森風を作って揚げる人は、かなり少なくなりましたが、現在でも保存会や愛好会、ねぶた師の方々などにより、青森風の伝統が引き継がれています。

今年も残すところあとわずかとなりました。メルマガを読んでもくださっている皆さまには、今年も一年お付き合いいただき感謝しております。来年もよろしくお願いいたします。良いお年をお迎えください。